

# 新風

平成27年 12月25日

多治見市立陶都中学校

No.10

## 合唱祭後をしっかりと見つめて…

多治見市立陶都中学校 松山 央

12月17日(木)、今年度の合唱祭が終わりました。実は、昨年度はこの学校報で合唱祭について取り上げたので、今年度は別の話題をとっていました。しかし、終わってみると、やはり合唱祭のことを取り上げないわけにはいかない思いが湧き起こり、またもやここに記させてもらいます。お許ください。

私にとって陶都中の合唱祭はこれで2回目となりますが、手前味噌ながら今年もすばらしい合唱祭を行うことができたと思っています。何と言っても嬉しかったことは、中学生という大切な時期において、陶中生は1年生も2年生も3年生も、間違いなく成長しているということ合唱を通して確信できたことでした。



1年生にとってみれば、これほど学級の合唱を専門的に追究したことはなかったことでしょう。その分、戸惑いも多かったことと思いますが、よくぞ付いてきたものと思います。体育祭から合唱祭へと、本校の二大行事を乗り越え、陶中生になりきったというような手応えをその合唱から感じました。2年生は、その学年合唱で2年生としての幅のある歌声を見事に示してくれました。市の音楽祭で刺激を受けた他校の良さをしっかりと取り込んでの合唱となっていました。3年生は、その声質・声量と歌いっぷりで圧倒的な存在感を全校に示してくれました。何せ、取り組み期間中の練習姿勢から違っていました。教室での練習風景を眺めながら、ふと足を止めて見つめ直してしまう表情がたくさん見つかりました。そして、その真剣な表情は、本番の合唱祭においてもまったく変わることなく、そのままを我々観客や後輩達に示してくれました。つまり、意識してどうこうではなく、正に学級や学年の仲間と歌うことに自分自身を入れ込んで、無我の境地で歌っているという状態だったのでしょうか。あれほど、自分自身を解放させ、歌うことに身を任せられるというのは、本当に値打ちのあることだと思つづく思いました。こんな私でさえ心震える状態だったわけですから、みずみずしい感性の1・2年生にとってみれば、強烈な印象だったと思います。今年もまた、確実に先輩から後輩へすばらしいバトンが引き渡されたと実感しました。

最後に、当日の閉会式での合唱委員長の言葉(抜粋)をここに載せさせていただきます。彼の言葉は、合唱祭の値打ちを踏まえつつ、さらにこの高まりを次に生かしていきたいという思いのものでした。

「～今後合唱祭が終わったからと言ってここまで成長してきたものを絶やすのはとてももったいないです。卒業や進級などの新たな目標に向かって付けた力を向上させていくことが大切です。また、事前取り組みなどでつけた教室整美などへの意識も向上させていかなければなりません。これらを3年生は新世代へと残し、一・2年生はそれを受け継いでいく期間です。また、全校一丸となって、再び一つの目標に向かって歩んでいきましょう。～」

実はこの合唱祭当日、校則に関わる生徒指導上の問題もありました。合唱祭という全校一丸となって臨んだ行事の当日であるだけに残念な事案発生でしたが、これも現実です。だからこそ、この合唱委員長の次を見つめる高い意識は尊いものであり、この大きな流れの自浄作用が、今の本校の強みであると思えるのです。この本流を絶やす事なかれ。私自身、改めて気持ちを引き締めた次第です。保護者の皆様方、今後ともどうかよろしくお願いたします。それでは、よいお年をお迎えください。

### 子どもが「自分で決めて行える」こと 多治見市教育委員会



今後子どもに、特につけていく必要がある力として「めあてを持って自分から動くことができる」力がある。子どもは、いずれは社会人・地域人として活躍することとなる。その時に、自分で困難を乗り越えたり、人と助け合って取り組んだりする力が求められる。

それらの力の素地を育む場は、子どもの今の生活の中にも、あるのではないのでしょうか。朝自分で起きることに始まり、身の回りの整理整頓、掃除やお手伝いなど、子どもが家庭で今「自分で決めて行っている」ことは、どんなことがあるか考えてみてください。

年末・年始を良い機会として、子どもが今「自分で決めて行える」ことを家庭で一緒に話し合い、安全に気をつけながら、できることやできそうなことから始めさせてみましょう。そして、その行いを「自分でできたね。」「助かったよ。」と認めていきましょう。